

踊念仏のはじまり

一遍の念仏踊りが最初に行われたのは、信州の佐久、小田切という場所で念仏を称えていときの事でした。

この時、念仏が自然に踊りになり、やがて踊りの輪は、急激に広がりました。

ある者は鉢を叩き、あるものはそれに合わせて手足を動かす。

ある者は踊りはね、あるものは手を叩くといったように、それはまったくの乱舞でした。

彼らは各人の喜びを、体一杯に表現しました。

一遍（右絵）は、その時の気持ちを「はねばはねよ をどらばをどれ 春駒の のり（法）の道をば知る人ぞ知る」と詠んでいます。

以後、一遍の布教は踊りとともに念仏（時宗）を広げていったのです。

それでは、何が人々をそのような激しい踊りの表現を取らせたのでしょうか。

踊り念仏は、社会の混乱期にはじまっています。

この時代は、旱魃・水害の自然災害が人々を襲いました。そして、戦乱は内続きました。その上に、元軍が攻めてくるという社会不安も重なりました。

人々は何かにたよろうとしました。それが神様であり仏様でした。

そんな不安な時代の中で人々は、一遍をとおして阿弥陀様から救いの声を聞いたのです。

一遍の説く仏の世界に人々のエネルギーが爆発しました。



時宗の衰えは檀家制度

鎌倉時代・室町時代、一遍の教えは踊りとともに、民衆の中に爆発的に広がりました。

しかし、現在、一遍の「時宗」は衰退して、ほとんどその活動を見ることができません。

それは、江戸時代の檀家制度によるものです。

檀家制度は、檀家を持たず信者をつくっていた時宗にとっては大打撃でした。

江戸時代以降、時宗は急速に衰えました。

野口念仏



一遍の亡き後も時宗の踊念仏はますます民衆に広がっていました。
教信寺の踊念仏は、一遍が亡くなった34年後の元亨三年（1323）、一遍上人の門弟湛阿（たんあ）が、広く念仏者を集めて教信寺で7日間の念仏踊りを行いました。
これが、野口大念仏の始まりだといわれています。
最近、野口の大念仏もずいぶん寂しくなりました。
手元に『わたしの人生』という冊子があります。
著者は、野口町古大内の柴田善次さん（明治25年3月11日生）です。
柴田さんが、その冊子で昔の「野口念仏」様子を少し書いておられます。

<昔の野口念仏>

「当時（明治時代の終わり）野口念仏は9日から14日までありました。
境内から前の道両側にはいろいろの店が出て、かるわざ、のぞき、からくり、ちくおんき、金物店、食べ物のみせもいろいろと出て、とてもにぎやかでありました。
11日の夜はとても多い人出で、12日は相撲があり、夜は音頭があり、遠い所から大勢の人が参って来たのであります」と書いておられます。

絵上：一遍像（神奈川県立歴史博物館蔵）

絵下：昔の野口念仏の賑わい